

子ども療養支援協会通信

Japanese Association for Child Care Support Vol. 8

目次 (2015年5月 第8号)

子ども療養支援士 (4期生) 修了式

平成27年3月20日、平成26年度子ども療養支援士修了式が順天堂大学にて執り行われました。今回は5名の新たな子ども療養支援士 CCS が誕生しました(池田世里奈、高橋優、藤川由紀子、山田恵、渡邊英理子、敬称略)。

当日は協会関係者や卒業生、一般の方を含む40名近い方が参加し、晴れの日に対応しい賑やかな式となりました。蝦名美智子先生の開式の辞に始まり、田中恭子事務局長からの修了報告、藤村正哲会長からの式辞の後に、小林信秋諮問委員、江原伯陽諮問委員から祝辞を頂きました。さらに、本協会の一期生で、現在子ども療養支援士として活躍されているオ木みどりさんからは激励の辞を頂きました。また卒業生を代表して藤川由紀子さんが謝辞を述べられました。

式途中では、江原先生の素敵なお提案で、「Auld Lang Syne (邦名: 蛍の光)」を参加者で唱和しました。「Auld Lang Syne」はスコットランド語で「久しぶり」との意味を持ち、その歌詞は旧友との再会を喜び、思い出話をするという内容だそうです。

式に引き続き、修了生による修了プロジェクト発表が行われました。タイトルや内容は様々でしたが、一年間の実習や講義を通して各自が多くのことを感じ、考え、実践してきたことがしっかりと伝わる内容でした。

このニュースレターが発行される頃には、修了生もそれぞれの場所で子ども療養支援士としての活動を始められていることでしょう。現場に出ると、実習とは違った楽しさや遣り甲斐とともに、苦労もあると思います。そんな時は、修了式で皆様から頂いた温かい祝辞や期待の言葉を思い出し、支えに明日の一步を踏み出してください。

細澤麻里子(順天堂大学小児科・事務局)



子ども療養支援士(4期生)修了式	
細澤麻里子--	1
新認定 CCSに贈る言葉	
林 富-----	2
初めまして	
2015期生自己紹介	
木村 結-----	3
山口侑里子----	3
「CCS ニューフェース レポート」	
2013期生の活動報告	
中井 朋子-----	4
小野山 晶菜---	5
佐藤 えりか ----	6
ボストン訪問記	
後藤真千子----	7
「子どもの広場」	
院内学級で勉強して	
Aさん(高校3年生)-----	10
「社会活動報告」	
病児とおもちゃケア10周年記念大会に参加して	
丸山 里奈----	11
「CCSの窓」	
子ども療養支援士として勤務して考えていること	
割田陽子-----	12
「諮問委員と共に」	
協働の中で培われてきた病児への寄り添い	
及川郁子-----	13
「教育委員会便り」	----- 14
「ニュース」と「お知らせ」-----	15
➤ 第118回小児科学会学術集会「多職種シンポジウム、「子どもの権利から見たこれからの療養環境〜」	
➤ 第3回子ども療養支援研究会	

新しく認定された子ども療養支援士に贈る言葉

林 富（宮城県立こども病院、理事）

平成 27 年 3 月、新しく 5 人の 2014 期生が修了を認定されました。1 年のうちに知識・智慧・考え方等を取っつけ 700 時間の実習を同時並行で進める過酷なハードルをクリアされた皆様のご努力と成果が高く評価された結果であり、深く敬意を表するものであります。

これまでの人生で最も濃密で休む暇もない、しかも療養中の子ども達に優しく接しながらサポートするという緊張感の中で、ご自身を奮い立たせながら努力された 1 年間であったろうと推察致します。

子ども療養支援協会は、平成 23 年度に子ども療養支援士(Child Care Staff, CCS)の研修を開始し、翌年 3 月に第一期生の修了を認定し 2 名が CCS としての活動を開始しました。以来、これまでに総計 18 人の CCS が誕生し種々の施設で活動しておられます。

子ども療養支援協会は、「CCS の役割」として、①病気や障がいをもつ子ども達の成長発達を支援し、入院や治療にまつわるトラウマを軽減・緩和する援助を行う。②子どもの発達段階や個性に配慮しながら、自分の課題(治療その他)に主体的に取り組めるように環境を整える。③子どもや家族の個々のニーズに応じた心理社会的支援に特化した活動を行う。を挙げています。

私は、そのために大事な心構え、立ち位置は、①子ども

を、力ある尊厳ある存在として捉える。②こどもの心に寄り添い、こどもの目線に立つ。③医療スタッフの一員だが、医療行為には関わらない。④こどもにとっては「いやなこと、痛いことをしない、安心できる存在」である。⑤医療者と子どもや家族との架け橋的役割である、などであると思います。特に①は常に忘れてはいけない心構えです。

2014 期生の皆様はこの 1 年間で多くのことを学び経験し CCS として認定されました。“今、子どもが一番ストレスだと感じていることは何か”、“目の前にいる子どものニーズは何か”、“子どもご家族も、みんな一人ひとり違って同じではない”、“一人ひとりのその時々々の心身の状態によって、様々な配慮が必要である”、“病院という制限の多い『非日常』の環境下で、療養に伴う苦痛と闘う子どもの意思を最大限に尊重する”、“入院中だけでなく退院後も継続的なケアに関わっていくことが重要である”ことなどを学びました。どれも大変大事な視点であります。

研修生と CCS はアマとプロの違いがあります。皆様はプロとしての次のスタート地点に立ち、さらに高いハードルをクリアしようとしています。優しさに強さが求められます。最初は不安でも、これから経験する一つ一つが皆様を大きく、CCS として成長させ、自信となり、子ども達とご家族にとって無くしてはならない存在になりますことを確信しています。





初めまして！

平成27年度は難関を突破した2名のCCS研修生(5期)を迎えています。その2015期生による自己紹介です



きむら ゆい
木村 結

緊張した試験を終え合格通知をいただいてから数ヶ月が経過しました。新たな一步を踏み出せることに喜びを感じると同時に、研修を乗り越えることができるのか、どうすれば子どもやご家族の力になれるのか考えたりする日々を送っています。

私は看護師として医療を受ける子どもたちと時間を過ごしてきました。子どもたちは不安に感じることや理不尽なこともある環境下で、あまり弱音を吐かず懸命に病気と向き合い闘っていました。恐い思いをして手術の前後に表情を強ばらせたり泣いたりしていた姿、また処置室で採血や処置を拒み泣いている姿がとても心に残っています。一方で、辛い治療を何度も乗り越え「げんきになったよ」と照れながら言い退院する姿も忘れられません。またあるお母さんが「いろいろあったけど、支えられて笑っていたことが多かった気がする。入院ってこんなに笑うものなのかな。」っておっしゃっていました。子どもやご両親を周囲のご家族や医療スタッフが支え、乗り越える環境を整えたり持っている力を引き出したりすることにより、子どもやご家族が困難を乗り越えたくましく成長していくのだと教えてもらいました。子どもやご家族にどのような介入がふさわしいか考え実践する時間はと

ても楽しくやりがいを感じましたが、やはり難しく自身の未熟な面も感じました。

例えば、プレパレーションを実施すると子どもたちはこれから行われることを理解しそれぞれの力で対処してくれました。それで成功していると感じていましたが、先輩の助言や勉強する中で、徐々に医療者にとって都合がよいことばかり伝えていたのではないかと考えるようになりました。子どもたちが体験すること、我慢してもらわなければいけないこと、どうしたらよくなるのかということ伝えてばかりで、子どもたちの思いや希望、潜在的な問題など子ども一人一人にあわせてフォローできる視点や知識、技術が足りていなかったのではないかと。そのような経験を踏まえて、子どもや家族の目線にあわせ、その子らしく過ごせるように支えていける子ども療養支援士になりたいと思っています。

最後に、今まで出会った子どもたちにたくさんのことを教えてもらいました。この職種の必要性をしてくれたのもそうです。彼らに感謝をしながら、数年後にはまた子どもたちやご家族に学んだことを還元し力になれたらと考えています。ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願ひ致します。



やまぐち ゆりこ
山口侑里子

「子どもたちがその子たちらしく生きていく手助けをしたい」合格通知をいただいた瞬間、小学生の頃から抱いていた夢に大きく一步近づきました。「合格」という二文字を見た瞬間、喜びとまわりの方々への感謝の気持ちで胸がいっぱいになった感覚を、今でも鮮明に覚えています。

元々子どもが好きであり、母親や祖母が入院をしていたこともあって病院に関わるが多かったため、「病院の子

どもたちを笑顔にしたい」「子どもたちがその子たちらしく生きてほしい」と漠然とした想いを抱いていました。そんな想いを抱きながら大学在学中に出会ったのが、チャイルドライフスペシャリスト(以下CLS)と子ども療養支援士でした。

子どもたちの目線に立ち、医療者や家族とは別の子どもたちの身近な存在として、遊びを通して主体的に生活をする手助けをし、優しさや愛情だけではなく強い志を持って活

躍する姿が、私にはとても魅力的に感じられました。

ボランティア活動や大学生活中所属していた学生団体、授業の研究などにおいて多くの子どもたちと関わり、年齢や国籍問わず子どもたちのパワーと可能性には心打たれることばかりでした。子どもは大人が思っている以上に、まわりをよく見、聞き、察し、考え、行動しており、大人に多くの気付きを与えてくれる存在だと思います。私自身も、そんな子どもたちのパワーに背中を押され、北米でのCLS資格修得を考えた米国での1年間の留学を決断することができました。留学生活の中で、自分を表現することを得意とする欧米人と忍耐強い日本人、ベビーシッターや学童など子

育てに第三者が関わることに抵抗の少ない欧米人と「子育ては母親が」という意識の強い日本人など、子育て観や制度、人の気質など、日本と米国の文化の差を実感し、日本で子ども療養支援士として活動することを目標に、受講生試験に挑戦することを決意しました。

これから講義や実習で、人生では経験したことのない多くの事がまっているかもしれません。わくわくと期待で胸を膨らますと同時に、多くの不安もありますが、「子ども療養支援士として自分ができることは何か」を考えながら、研修生として多くのことを学べることに感謝して精進していきたいと思っています。



CCS となって一年、2013 期生の活動報告を聞きましょう

3月までの活動を振り返って

中井 朋子(旧姓、小松) (大阪府立母子保健総合医療センター、2013期 CCS)

3月までの活動を振り返ると、出逢いと感謝の一年でした。

4月の入職当時は、自分に何ができるのか？自問自答の日々でしたが、少しずつ多職種の方々とのコミュニケーションの中から自分の存在意義を見出す事ができたように感じます。子どもたちとの関係は長期入院の子や付き添いの少ない子など様々な子どもとの出逢いの中から、子どもたちが今、何を求めているのか、子どもの心の声に耳を傾けるように関わりを持ちました。私が常に心がけていた事は、子どもが安心できるように、子どものタイミングに合わせることで、子どもの歩幅に添えるように見守る、待てる心の余裕を持つ事でした。そうする事で子どもたちは自然と遊びを通してポツポツと「いつになったら退院できるのかな?」「もう入院嫌や」「兄弟に会いたい」と自分の思いを伝えてくれるようになりました。ストレスの多い環境の中、家族に心配をかけないように健気に精一杯頑張っている子どもたちを前に「頑張

りすぎないでもいいよ。十分頑張ってるよ。嫌な時は我慢しないで嫌って言うてもいいんだよ」と私は声をかけ続けました。子どもたちの中に「将来の夢はお姉さんみたいになりたい」「○○さんみたいに皆を笑顔にできる大人になりたい」と伝えて退院する子どもたちにも出逢い、私は子どもたちから多くの優しさ、強さをもらい、成長させて頂いた事を今、心から感謝しています。一年の子ども療養支援士の研修を終え、専門職としての現場での実践は研修では味わえない多くの学びと喜び、悩み、悲しみの連続でした。通勤時間が長かった為、毎日の5時起きで体力的にしんどい時もありましたが、子どもの笑顔を見る為に通い続ける事ができたように思います。プレレションやディストラクションなどは、子どもたちの反応を見ながら、自分の中で常に評価し、改善を加えながら行っていたつもりでしたが、反省する事もまだまだ多く学び続けたいといけなさと感じています。この一年、多くの子どもたち、子どもの家族、多職種と関わり、

何よりもコミュニケーション能力の必要性を実感しました。話し方一つとっても、言葉のトーン、伝え方、物腰の柔らかさ、表情など全ての要素でその人の印象が決まるので、私自身、自分の中でストレスを溜めないように休みの過ごし方等

も大切だと思っています。バランスの取れた働き方を行いながら、研修やこの一年で学んだ事を大切に今後につけていきたいと思っています。

CCS ニューフェース レポート

一年間の活動を振り返って

小野山 晶菜 (国立がん研究センター中央病院、2013期 CCS)

子ども療養支援士として活動を初めて、一年が経ちました。私が勤務する国立がん研究センター中央病院では、現在子ども療養支援士2名体制で小児腫瘍科を含む混合病棟を中心に活動をしています。この一年間たくさんの子どもと家族に出会い、子どもにとって自分たちができることは何かと真剣に考えるスタッフたちの様々な想いに触れ、日々勉強をさせて頂いています。

主な活動としては、遊びの支援を通して治療や処置に伴う心のサポートやきょうだい支援、療養環境づくり、グリーフサポートなどを行っています。日々の関わりのなかで、遊びは子どもたちにとって、日常の一部であり、言葉にできない感情の表出やストレス発散、コミュニケーションツール、仲間作りや居場所づくりなど様々な役割を果たしていると感じています。

ある5歳の男の子Aくんが、入院の際にいつも連れてきているお気に入りのぬいぐるみに自分と同じように包帯を巻きたいと言い、一緒にメディカルブレイをおこなうことにしました。AくんのぬいぐるみにAくんと同じように足に包帯を巻きつけると、Aくんはぬいぐるみのバイタルチェックを行い、次にシリンジを手にとって「チクしまーす」とぬいぐるみの足に注射を行いました。「まだです」と言いながら、何度も何度もぬいぐるみに注射を繰り返していました。Aくんはそのメディカルブレイを入院の間毎日同じように繰り返し、どこに移動するにもぬいぐるみを連れて歩いていました。ある日、Aくんから「なんでAはいつも2回注射するの？チクやだよー。」とお話がありました。鼠蹊部に溜まってしまうお水を抜くための処置があったため、外来で採血のためのCVポート穿刺と鼠蹊部のドレナージの2つの処置が何度か続いていたのです。そ

の鼠蹊部の処置が必要なくなってくると、Aくんがメディカルブレイを希望することはなくなり、ぬいぐるみの包帯も外されました。Aくんにとって穿刺の処置は大きなストレスでありましたが、それをメディカルブレイで表現し、昇華していたのだと思います。

子ども達と同じ遊びを何度も繰り返すことは、ストレスを緩和することや理解を深めること、癒しなどに繋がっているのです。そのため、その時その子に必要な遊びにじっくり寄り添い付き合うことが必要になってきます。私たち子ども療養支援士にはミッションがないことが強みだと実習の時に教わりました。“子ども達のニーズをくみ取って、その子がやりたいことにとことん付き合うことができる”そんなことも専門性の一つなのではないかと感じています。

まだまだ自分の活動に自信が持てず、もっとできることがあるのではないかと、これでいいのかと立ち止まって振り返っての日々ですが、一人ひとりの子ども達との関わりのひとつひとつを大切に、子どもの気持ちに寄り添っていけるよう取り組んでいきたいと思っています。



CCSニューフェース レポート

医療現場に小さな変化を少しずつ

佐藤 えりか(旧姓 大村) (2013期 CCS)

私は、子ども療養支援士2013期生の研修を経て、昨年4月に以前自分が勤めていた小児科病棟に戻りました。今までは医療者としての視点でしか見ていなかった病棟を、子ども療養支援士の学びを終えて培った視点で改めて見てみると、同じ場所のはずなのに、たくさんの気づきがありました。日本で医療を受ける子どもの療養環境は、小児科のある病院の99%でチャイルド・ライフ・スペシャリストを雇用している米国や、小児病床10～15人に1人の割合でホスピタル・プレイ・スペシャリストが働いている英国と比較したら「子どもにやさしい療養環境」とは言い切れない環境がほとんどだと思います。

では、日本における子どもの療養環境が子どもの目線では成り立っていない理由は何なのでしょう。海外の病院のように寄付が少なく予算が少ないからアメニティの充実が不十分？業務優先、効率優先、衛生面がなによりも重視されているから？理由はいくつか挙がると思いますが、私は子どもの療養環境を整えることの必要性を訴える声はまだまだ小さいことも、理由の一つではないかと思っています。

私は、子どもと感覚的にかかわるのではなく、子どもの発達段階や個性を論理的に考慮して子どもの目線を大切にしながら、子どものニーズに合わせてかかわることができ、子ども療養支援士の専門性の一つだと思っています。療養環境を調整することが、ただ「子どもにとって良いから」という理由ではなく、きちんとした論理的根拠をもっ

て相手にその重要性と必要性を理解してもらうことが活動していく上で難しいと感じるところでした。

私は、昨年4月の気づきから、1年間の間でプレイルームの整理整頓、えのぐの会、おんがくの会といった、月に1回のイベントの開催、病棟でのおもちゃ類の充実など、できることから少しずつ環境を調整させてもらいました。これは、私一人の力では、到底成し遂げられませんでした。私の気づきを理解し、病院とかけあってくれる上司や、日々看護の中に遊びを組み込もうと業務調整してくれるスタッフなどさまざまな人たちの協力があったからこそ、実現できたものだと思います。「子どもにやさしい療養環境を作りたい」という大きな目標を達成するためには、子どもと同じ目線で病棟を見る視点と、それを実現可能にするための実践力の両方が必要です。私は学生の時に「多職種との協働」という言葉を何度も使っていましたが、その言葉の本質をやっと理解できたように思いました。

この1年間を振り返り、感じたことは、変化とは、ひとつひとつ、小さなことの積み重ねにより生まれるものであり、ある日突然ガラリと変えることはできないということです。さざ波がやがて大きな波へと変化していくように、子どもの療養環境を整えるため、小さな変化を少しずつ起こしていくきっかけづくりをすることが、私たち子ども療養支援士に与えられた役割のひとつであると感じています。





ボストン訪問記

後藤真千子（大阪府立母子保健総合医療センター，理事・CCS・HPS）

2014年9月24日～27日 下記のようなプランで米国マサチューセッツ州ボストンを訪問しました。

Date	Location	Person
Wednesday, Sept 24 th	Wheelock College	Paul Thayer
	Wheelock College Grad schl class	Anne or Suzanne?
Thursday, Sept 25 th	Tufts Medical Center	Andrea
Friday, Sept 26 th	Massachusetts General Hospital	Carolyn
Saturday, Sept 27 th	Paul's class?	Death and grief

このたびのボストン訪問の目的は、米国での子ども療養支援の実情を自分の目で見ることでした。短い期間、限られた地域での訪問ではありますが、なにか得るものがあるのではないかと訪ねました。ボストン在住の CLS 土屋香菜子さんにお世話になり、上記のようなスケジュールで、訪問しました。詳細を報告すれば、紙面が足りなくなりますので、特に気にかかったことのみご報告します。

Wheelock College では、Paul Thayer 教授にお目にかかり、CLS 協会の指導者の考え方に関してお話を伺いました。い

ちばん記憶に残っているのは、CLS カウンシルの中には、2つの考え方があり、ひとつは、CLS 以外に子ども療養支援の職種はない、CLS が世界中で活躍すべきと言う考え方、他方は、各国の実情に合った、子ども療養支援のあり方、子ども療養支援の専門家があるべきだと言う考え方です。Thayer 先生のお考えは後者の方で、子ども療養支援協会と支援士の発展をこころから応援するといってくださいました。スカラシップをとり日本に行ってお手伝いしたいとも言っていました。教育方法を教えるとのことでした。



又、学部では、child centered care (Mrs. Anne)、大学院で、Death and grief (Paul Thayer) の授業を聴講しました。日本人の聴講生も 2 人おられました。授業中の発言回数が点数に加味(成績の点数の 40 パーセントは

Participation)されるので、皆良く話されます。何を言っても良いようですが、その日のテーマは、あらかじめ知らされており、必要な資料は予習されているとのことでした。「自分が読んで考えたことを発言しないのは、考えてないに等しい」とのこ

と。授業内容は、理論だけではなく、実習中に教えるような具体的なことを時間をかけて事細かく丁寧に講義されていました。これなら実習先に行っても、スーパーバイザーはかなりやりやすいなと思いました。実習先が確保できないので限られた人数の学生しか教えることが出来ないそうです。実習先の確保は米国でも難しそうです。又、CLS の資格を取っても就職先が充分ないとも言われていました。最後に「子ども療養支援士」の英語訳は「Pediatric care staff」がよいのではないかとされました。



次に Tufts Medical Center の Andrea(担当 CLS)を見学しました。

20 年前に訪問していれば、日本との違いに大いに驚いたと思いますが、異質の世界のような印象は受けませんでした。ただ、おもちゃの収納庫の大きさ、大量の玩具や資料には目を見張りました。ある企業からの寄付であり、時々チェックしに来てたりないものがあれば補充してくれるそうで、うらやましい限りでした。ディレクターは、寄付を集めるに大変で、其れがメインの仕事のようでした。



病院での業務内容は、ニーズ判定、看護師からの依頼をもとに関与し、午後からは、ペットセラピー、ミュージックセラピー、ボランティアに必要なところに行ってもらおうそうです。カルテ記入はしないとのこと(日本の方が進んでる?)、おもちゃの使いまわしはしないこと(あげるか処分する? 基金に供給されている)には驚きました。CLSは、病棟2人、オペ室1人、外来2人プレイルーム2人、血液内科2人、救急2人配置されています。日本も、このようにありたいと思いました。



次の Massachusetts General Hospital では、Carolyn(CLS)に案内していただきました。

印象的なのは、手術室で、CLS が常駐していました。手術前の待合室→手術前の個室→手術室→リカバリー室→退院または病棟という流れで進みます。



→ 手術室 →



手術前の個室は左列、リカバリールームは右列で、間
CLS の棚が、奥にナース・ステーション、廊下の突き当たり
奥が手術室となっており、この広いスペースで CLS は大忙
しだそうです。つりがとても合理的で感心しました。

oncology/hematology ユニットは、イギリスと同じように、外
来の出入り口が、一般と別のところにあり、ゆったりしていま
した。やはり、2人の主任CLSの主な仕事は、寄付集めと言
うことでした。



入院病棟プレイルーム



プレイルーム



外来待合室

香菜子さん(右)は **Boston Children's Museum** で、
CLSとして雇われ、働いておられます。
ボストン子ども病院見学を楽しみにしていましたが、見学



患児の写真と作品

者は受け入れてもらえませんでした。残念！とはいうものの、
わたしにとって、とても意義深い、楽しい訪問になりました。
皆様に感謝しています。



今号の担当編集委員は2012期 CCSの割田陽子です

白血病で入院していた高校3年生のAさんが、退院前に院内学級の授業で書いた作文を紹介させていただきます。

院内学級で勉強して

Aさん(高校3年生)

およそ半年間入院をしました。小さい頃から風邪などの軽い病気にかかっていたものの、入院するほどの病気にはなった事が無かったので、何だか他人事のような気持ちでした。病院に入院して1か月間は、ただ毎日ぼんやりとして過ごしていました。その翌月も翌々月も、ひたすら毎日を無駄に過ごしていました。そんな私を心配してくれた母が、院内学級を紹介してくれました。

入院当初は山のように送ってもらっていたメールも、受験学年なのであまり来なくなりました。その頃の私は、やや自暴自棄になっていました。あと半年病院にいれば治ると説明されても、4人部屋の中の人、皆私と同じ病気で再発したと言っていました。私はその話を聞いて、自分の人生を全て投げ出したいような心持ちに襲われました。しかし、退院後の色々な事を考えると、このまま過ごすより、先の事を考え、高校生の最後の1年を病院内の学校で過ごす事は自分にとってプラスになると考えました。本当は私のいる病棟は大人だけの病棟だったので、なかなか授業を受ける許可は降りませんでした。学校の先生と医師との話し合いで紆余曲折もあったりして、何とか院内学級に入学する事ができました。私は病気の性質上、院内学級に登校して皆と一緒に授業を受けることができませんでしたが、毎日院内学級の先生が来て下さり、丁寧に教えて下さったおかげで、とても楽しく授業を受けることが出来ました。一対一で丁寧に教えて下さったので、苦手な英語や地学も少しずつ分かっていきました。

半年の入院を経て、私は『健康に生きることができる事の有難み』をとても感じています。また、この半年を乗り越える事が出来たのは、両親や先生や友人、周りの人々の『温

かい励まし』があったからこそだと思っています。この2つのことを実感できただけでも、今回の入院は自分にとってマイナスでは無いと信じています。

院内学級を通じて、私と同じように苦しんでいる同年代の人の話を聞き、私も頑張らなくてはととても励まされました。この体験を忘れず、私自身の病気と向き合い、これからの人生に活かしていきたいと思います。



私は、Aさんの諦めなかった気持ちと自分の力で辛い療養生活を乗り越えようと努力してきたことが、その後のAさんの生きる力になっているということに感動しました。Aさんをはじめ、子どもたちの力にはいつも励まされます。

子ども療養支援士には、子どもたちが持っている力を充分に発揮できるようサポートする役割があります。今回Aさんの作文を読み、子どもたちにとって辛くて嫌だと感じる療養体験を、子どもたちが自分の力で乗り越え、最後に出来た自信や喜びを感じられるような、その先に続く生活や成長の機会につながるようなサポートをもっと増やし広げていきたいと改めて感じました。

Aさんは、退院後も強い意志を持って勉強に取り組み、この春、見事大学に合格しました。毎日楽しく大学に通っているそうです。

「Aさん、大学進学おめでとございます。そして、この度は作文をご提供戴きありがとうございました。これからのAさんの幸せと、ご活躍を、お祈りしています。」

割田陽子(東京大学医学部附属病院・2012期 CCS)

社会活動報告

病児の遊びとおもちゃケア 10周年記念大会に参加して

丸山 里奈（榊原記念病院、2013期 CCS）

3月8日、国立成育医療センターにて行われた病院における遊び環境を考える「病児の遊びとおもちゃケア」に参加させて頂きました。会場は全国から医師、看護師など医療者の皆さんをはじめ、おもちゃのメーカーさんや、病院で活動されているボランティアの方々など、10年の歴史を感じさせる大勢の方で溢れており、講演やパネルディスカッション、ブースでの展示など盛りだくさんの内容でした。

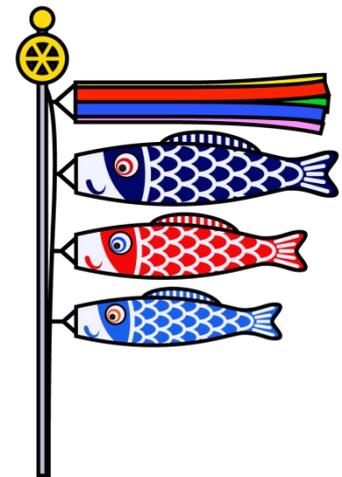
子ども療養支援協会としては、普段現場で使っているツールやおもちゃ、手作りのもの、プレレーションドールの「ポッケちゃん」「ふればちゃん」、「もしもしガイドブック」などを展示し、参加された皆様に見て、触って体験させて頂きました。ブースには職種を問わずたくさんの方が訪れて下さり、ツールやおもちゃを介して情報交換など会話が弾み、「子ども療養支援士になりたいです！」「どのような勉強をされたのですか？」など、何度も聞きに来て下さる方もいて、同じ思いを持って日々活動している皆さんとお会いできる貴重な機会だったと思います。

私は今回で2回目の参加となりましたが、会場に集まる皆さんは本当に子ども・家族全体のことを一生懸命考えていることが伝わり、暖かく、そして背中を押されるような時間でした。普段1人で活動していると、心細い気持ちになることもありますが、遊びは子どもの生活そのものであり、療養中でも障がいがあっても、個性を大事にそれぞれの「生活」の部分を支えるお手伝いをしていきたいと、改めて思い返すことができました。

子ども療養支援士の実習中から、今回のセミナー主催のおもちゃライブラリー、難病のこども支援全国ネットワーク、東京おもちゃ美術館の皆様には大変お世話になっており、10年間、様々な苦勞をされながらも病院に居るこどもたちの環境を考え続け、今も活動の幅を広げて下さっていること心から敬意を表するとともに感謝申し上げます。また、私たち子ども療養支援士もその輪に加わり、よりよい療養環境を作っていくべく努力していきたいと思います。これからもよろしくお願ひ致します。

☆参加者：

丸山 里奈、小野山 晶菜、蛭田 悠子、高橋 優、藤川 由紀子、渡邊 英理子、山田 恵





子ども療養支援士として勤務して考えていること

割田陽子（東京大学医学部附属病院、2012 期 CCS）

平成 25 年 4 月より子ども療養支援士として活動を始め、まる 2 年が経ちました。現在、私は東京大学医学部附属病院・看護部のこども支援担当に所属し、小児医療センター、小児科・小児外科外来をはじめ、病院中の子ども、ご家族のサポートを行っています。

活動を始めた当初は、どのような活動から始めたら良いか、戸惑い悩む日々でしたが、病棟や外来等の現場へ行くと、処置や検査、治療、入院環境に慣れず、戸惑い不安そうにしている子どもたちがたくさんいました。その時、私一人で悩んで解決するのではなく、これからは目の前にいる子どもたちと一緒に悩み、一緒に乗り越える方法を考えていく人になろうと、自分の役割を再確認し、気持ち新たに活動を始めた当時に思い出します。

子どもたちにたくさん会うようになってからは、子どもたちの話をじっくり聞く機会がとも増えました。子どもたちの視点で検査や治療環境を知るようになると、「こんなところが不安だったんだ。」「あんなところで困っていたんだ。」「…など、子どもたちに必要なサポートもいろいろ見えてきました。『何よりも先ず、できる限り現場の子どもたちに会いに行き、現状を把握すること』この職種のとても大事な役割だと感じています。子どもたちの生の声や感じていることをたくさん拾い現場に返していくことが、子ども主体の療養環境を整える一歩になっていくのではないかと感じています。

もう一つ私が大事に感じていることがあります。それは、当院には子どもに優しいスタッフがたくさんいるということです。病棟、外来、検査部、治療部…どの現場へ行っても、子どもたちが処置や検査、治療、入院生活を上

手に乗り越えられるよう、一生懸命に考えサポートしているスタッフがたくさんいます。子どもと一緒にサポートする仲間が増えれば増えるほど、子どもたちに優しい環境も増えるわけです。私はそのようなスタッフの方々の力をたくさん借りたいと思っています。『出来るだけ現場に出向き、スタッフとコミュニケーションをとること』スタッフ皆さんの思いを知り、その思いに寄り添いながら子どもにとって優しい療養環境が病院のいろいろなところに広がっていければ良いなあと感じています。

以上の 2 つは、これから活動していく上でも大事にしていきたいと感じていることです。

2 年間の活動を終え、声をかけてくる子どもたちや、ご家族、スタッフが増えてきました。一から始めた活動が、少しずつですが広がっているように感じています。子どもが自らの力で目の前の課題に取り組んだ最後に、「頑張ったよ！」と自信満々の表情を見せてくれる場面は、何度見ても子どもの成長を感じ嬉しくなります。私は、子どもたちの成長の機会をサポートするこの職種の重要性を信じ、今後、この職種の仲間が増え、定着していけるよう、さらに病院内や世間一般の方々に認められるような活動と努力をしていきたいと思っています。





協働の中で培われてきた病児への寄り添い

及川郁子（聖路加国際大学看護学部・諮問委員）

ずいぶん前の話になりますが、私が入職した小児病棟には保母さん（現在の保育士）がすでに働いておりました。医師と同じような感覚で一緒に働くことが当たり前で、ずいぶん助けられました。ほとんど何も知らなかった子どもたちへの関わり方、何気ないプレールームでの家族との会話から見えてくるそれぞれの家庭の様子を、毎朝の申し送りやショートカンファレンスのたびに教えていただき、そのことを医師や看護師間で共有しながら日々のケアに活かしていました。ある時、脳性麻痺のお子さん（9歳くらいだったと思います）の食事介助を、研修医に教えていた場面がありました。保母さんは、緊張で抱っこや嚥下の難しいお子さんに話しかけながら子どもの緊張を和らげ、タイミングよく口の中に食物を運ぶその一連の動作を自然に行っていました。側にいた外科の研修医はその状況に引き込まれるように、子どもをぎこちなく抱っこしながらも、子どもにたくさん語りかけながら食事を口に運ぶタイミングを取ろうと一生懸命でした。なかなか上手にタイミングを取ることはできないものの、子どもは嫌な顔をせず笑顔で研修医に応えていました。私は少し離れたところにはいたのですが、そこには、子どもと保母さんと研修医の3者の気持ちが通じ合う、しっくり重なった間主観的關係ができていたように感じ、それを見ている私自身もともにいる思いでした。

当時の保育士は、専門的知識や訓練を受けて医療機関にいたわけではありません。人柄もあったかもしれませんが、日々の経験やともに働く人々との協働の中で培われてきた病児への寄り添いがあったように思います。

子ども療養支援士は、できたばかりの職種です。まだまだなじみが浅く、受け入れて下さる医療機関も少ない状況です。少しずつ増えているとはいえCLSやHPSの方も同様でしょう。しかも、これまでの日本の医療現場は医師や看護師が多くの役割を担ってきました。新しい職種を受け入れる、ともに働くことの必要性や重要性がやっと基礎教育に根付き始めたところです。自分たちの活動や役割を知っていただき、これまでどのように同じでどのように違うかを理解するには時間が掛ります。子ども療養支援士の方々が今行っていることを着実に積み上げていくことは地道な作業ですが、受け入れてくれる病院だからでできることではなく、どの病院でもできることを示していくことプロセスとして大事なことと思います。もちろん、そのために人材を増やしていくことも必要です。

子どものケアの原点は、子どものことが「わかる」「感じられる」「伝わる」ということだと思います。そして、子ども療養支援士の皆さんは、専門的知識と技術をもってそれを周囲に示すことができる人です。プレバレーションも含め援助技法は、その原点の上に成り立つものではないでしょうか。



**教育委員長 後藤真千子**

この「教育委員会」の始まりは、もともと、十数人の CLS や HPS が集まって、「日本にも CLS や HPS のような専門職が必要」と時間を忘れて話し合った、その仲間たちの会に「実行委員会」と名付けたことにあります。すなわち「日本でも独自のより専門性の高い人材の育成に取り組まなくてはならない。CLS・HPS に相当する心理社会的支援に特化した活動を行う専門職を日本の文化と社会に沿った考え方と方法に従い国内で教育・養成しなくてはならない」と話しあった、2008 年 8 月のことでした。

その後、たくさんの諸先生方の賛同を得て、おおきな輪となり、子ども療養支援協会が設立されました。「実行委員会」は「教育委員会」に名前を変え、本格的に当該職種の教育について考え、実行する会となりました。

あれから、5 年になります。先日の教育委員会では、初めて当該職種以外の先生に教育委員として参加していただき、新たな一步を踏み出しました。第三者の目から見た建設的な意見を頂くためです

今年度の最大の課題は、いかに実習先病院を確保するかです。実習先の確保は、より多くの実習生の募集とより

多くの子ども療養支援士の病院への供給につながるからです。そのためには、当該職種に従事している人々が実習教育に参加しやすいように、実習内容の明確化・スーパーバイザーの共通トレーニング・教育システム一本化を必須、緊急の課題であるとの共通認識に至っています。基本方針として会員の中での相互理解を深め、質の高い教育システムを提案できるように努力したいと考えています。

2015 年度第 1 回教育委員会では、当面の目標として、

- アセスメント教育の充実
- 教育システムの充実(エビデンスシステムによる実習評価、レポートの採点・評価等)
- テキストの充実(ハンドブック・マニュアル)
- スーパーバイザーの研修の充実
- 勉強会による子ども療養支援士の質の継続的向上

について検討しました。

出来るだけ早く現実的な成果を得ることが出来るよう、出席者一同で真剣に話しあいました。





第118回小児科学会学術集会(2015年4月17日～19日、大阪国際会議場)において、

「多職種シンポジウム」

“子どもの権利から見たこれからの療養環境～小児科医として、何を指すのか～”

が開かれ、協会関係者からも発表の機会がありました。~~300人以上~~¹⁾の参加者があり、フロアからも活発な質疑・討論が行われるなど、これからの子どもの療養環境改善へ向けた時代のうねりを感じさせるシンポジウムとなっていました。

1)173人 (主催者調べ)

座長 及川郁子(聖路加国際大学看護学部教授)、藤村正哲(大阪府立母子保健総合医療センター名誉総長)

1. 医療を受ける子どもの権利 加藤 高志:日本弁護士連合会 人権擁護委員会・弁護士
2. 子どもの療養環境改善の実践と多職種支援～大学病院での実践
岡 明:東京大学医学部附属病院小児医療センター・医師
3. 小児がん病棟のAYA世代から教えてもらったこと～AYA世代と子ども療養支援士の関わり
本田 真己子:国立がん研究センター中央病院 小児腫瘍科・子ども療養支援士
4. 多職種連携による子ども療養支援の実践と課題
山地理恵:大阪府立総合医療センター・ホスピタル・プレイスペシャリスト
5. 子どもの療養と心因反応～その介入のエビデンス
田中恭子:国立成育医療研究センターこころの診療部・医師



第3回日本子ども療養支援研究会 開催のお知らせ

テーマ: 子ども療養支援の発展～ジャパニーズスタイルの追究～

会長: 宮本朋幸(横須賀市立うわまち病院小児医療センター長)

日時: 平成27年6月6日(土)～7日(日)

場所: セントラルホテル 神奈川県横須賀市若松町2-8 046-827-1111、(京浜急行横須賀中央駅下車徒歩1分)

参加費: 5000円(懇親会別)、事前登録はありません

【プログラム】

6月6日(土)

13:00 受付開始

13:30 開会の辞

13:35～15:30 シンポジウム1 子ども療養支援士の今

15:40～16:40 一般演題1

16:50～17:50 教育講演 副島賢和先生(昭和大学病院)

こころの声と言葉になるとき～院内学級の子どもたちが教えてくれた大切なこと～

18:00～20:00 懇親会(会費制3000円)

6月7日(日)

9:00 - 9:45 会長要望演題

9:50 - 10:50 一般演題 2

11:00 - 11:50 特別講演 「いのちの理由」 寺澤大祐先生(岐阜県総合医療センター 新生児内科)

12:00 - 12:50 ランチョンセミナー 免疫の低下したこどもの療養支援 土田昌宏先生(茨城県立こども病院)

13:00 - 13:30 総会

13:40 - 15:55 シンポジウム2 日本における子ども療養支援のあり方

15:55 閉会の辞

【事務局】 横須賀市立うわまち病院小児医療センター内, 〒238-8567 神奈川県横須賀市 上町 2-36

TEL 046-823-2630, FAX 046-827-1305, E-mail uwamachishoni@gmail.com

事務局からのお知らせ

● 年会費の納入のお願い

2014年度会費未納の会員の方は下記口座までご入金の際、宜しくお申し上げます。なお2014年度、2015年度の年会費は正会員および賛助会員共に各3000円です。

振込先:みずほ銀行 本郷支店 「普通」2813671 子ども療養支援協会

● 4月からの実習生のご紹介

平成27年度子ども療養支援認定コースをスタートしました。今年は2名の研修生をお迎えし、4月13日開講式を行い、前期の講義を2週間行ないました。5月の連休明けから、大阪市立総合医療センター、静岡県立こども病院、横須賀市立うわまち病院にて実習を開始致します。今後また実習中のご様子などをお伝えしていきたいと思っております。

● 今後の予定

子ども療養支援協会の行事

開催日	内容	会場
平成27年4月13日～4月28日	開講式・前期講義	東京
5月～	病院実習開始	大阪ほか
6月6日(土)、7日(日)	第3回日本子ども療養支援研究会	横須賀
9月～	後期講義	東京
11月中旬	平成28年度実習生募集開始	
平成28年3月19日(土)	研修修了式・研修報告会	東京

編集後記

ニュースレターで取り上げたい話題やご提案・ご希望を歓迎します。下記事務局までお寄せください。

一般を含め、みなさまからの投稿を歓迎します (事務局まで e-mail: kodomoryoyoshien@yahoo.co.jp)

子ども療養支援協会事務局

〒113-8421 東京都文京区本郷2-1-1 順天堂大学医学部小児科 内

本協会と子ども療養支援士に関してのご質問はEメールによりお問い合わせ下さい。

(回答にお時間をいただく場合がありますが、予めご了承下さい)

e-mail: kodomoryoyoshien@yahoo.co.jp

子ども療養支援協会ホームページ <http://kodomoryoyoshien.jp/>